

星座の三家分類の形成と日本における受容

前 原 あやの

Formation of a Classification System of Sanjia (三家) and Acceptance in Japan

MAEHARA Ayano

Formation of a classification system of Sanjia (三家) is one of constellation classification methods in China. In this paper I considered how was Formation of a classification system of Sanjia (三家) formed out and whether it developed. There is little documents in China, but "Sanka bosan" (三家簿讃) of Kyoto Prefectural Library and Archives (京都府立総合資料館), and "Temmon yoroku" (天文要録) of Maedaikutokukai Sonkeikaku library (前田育徳会尊経閣文庫) etc. exist in Japan. While the way to color-coded constellation in three colors was also lost from early times in China, it was used by "Temmon seisho" (天文成象) etc. in the Edo Period in Japan. Formation of a classification system of Sanjia (三家) that has lost meaning in early in China, it will be said that a feature of Japan that was left in the form close to the prototype.

キーワード：三家分類 『三家簿讃』 若杉家文書 星座

はじめに

中国古来の星座¹⁾は、ギリシア神話にもとづく西欧の星座とは全く異なる体系をもっている。中国の人々は、星々に地上の建造物、官職、動物などの名を与え、独自の天上世界を描いた。どの星にどの名称を与え、それらの星座をどう配置し分類するかという判断の各過程においては、その時々の人々の世界認識が反映されると考えられる。それは、現実の地上世界をそのまま投影するというよりはむしろ、ある程度理念化・理想化された姿であろう。

藪内清氏は「中国・朝鮮・日本・印度の星座」のなかで、「漢から三国時代にかけて天文観測が進歩す

1) 「星座」という語は『史記索隠』で唐の司馬貞が用い、『開元占経』でも唐の瞿曇悉達が用いているものの、唐以前の用例は確認できない。唐以前は二十八宿を星宿、他の星座を星官と呼ぶのが一般的であったと考えられるが、本稿では便宜上これらを総称して星座とする。

るとともに、星座の数が増してきた」と述べる²⁾。また、『中国の星座の歴史』を著わした大崎正次氏は、後漢時代から三国時代を予兆が重視され未来への予言などが空前の盛行をみるようになった時期ととらえ、「天文観測、星占もいよいよ精密になり、それにともなって、星占に深くかかわりのある星座の数も多く増さざるを得なくなった」と述べ、占星術の流行とともに星座が増加したという³⁾。実際、前漢の司馬遷『史記』天官書に載る星座数が六十五個であるのに対し、『漢書』天文志では「中外官凡百一十八名、積数七百八十三星」（中外の官凡そ百一十八名、積数七百八十三星）といい、『後漢書』天文志劉昭注所引の後漢・張衡『靈憲』では、「中外之官、常明者百有二十四、可名者三百二十、為星二千五百。而海人之占未存焉。微星之数、蓋万一千五百二十」（中外の官、常に明るき者百有二十四、名づくべき者三百二十、星たるもの二千五百。而れども海人の占未だ焉に存せず。微星の数、蓋し万一千五百二十）とあって、次第に星座数が増加したことは明らかである。星座数の増加にともない、その整理・分類についてもいくつかの方法が用いられるようになった。

本稿では、そうした星座分類法の1つである三家分類の形成と展開の過程を検討する。三家分類の実態を明らかにするためには、中国に残る資料だけでは不十分である。そこで、日本にのみ現存する資料なども併せ用いることで、日本における三家分類の受容・展開の諸相についても考察する。その際、文字資料だけでなく、星図も取り上げることとする。

一、主な星座分類法

本題に入る前に、前提として中国の星座分類の概要を整理しておきたい。多くの星座名を列挙する際には、いくつかのグループに分けて星座を配列する。グループの作り方には複数のバリエーションがあるが、中国の場合、大きく4種に分けることができる。

1つは、『史記』天官書や『漢書』天文志に見える五宮の分類である。天の北極を中心とする区域を「中宮」、その周囲を四方に分けてそれぞれを「東宮」「南宮」「西宮」「北宮」と呼んだ。これは、その後の文献にあまり見られないことから、比較的早期の分類と見なすことができる。

2つ目は、中宮、二十八舎（宿）、外官の分類である。これは、初唐の太史令である李淳風が用いた分類法で、李淳風が著わした『晋書』天文志、『隋書』天文志、『乙巳占』に見える⁴⁾。五宮分類と同様、天の北極を中心とする中宮を規定し、その外縁にあたる天の赤道に沿って分布する星座を二十八宿、そして二十八宿より天の南極側の星座を外官とする、3重の区分である⁵⁾。こうした同心円状の区分は、地上の場合の『山海経』と類似する。『山海経』では、山経五篇（南山経、西山経、北山経、東山経、中山経）のほか、「海」をキーワードに海内経四篇（海内南経、海内西経、海内北経、海内東経）、海外経四

2) 藪内清「中国・朝鮮・日本・印度の星座」（野尻抱影『星座』新天文学講座Ⅰ、恒星社厚生閣、1959年）。

3) 大崎正次『中国の星座の歴史』（雄山閣、1987年）、37頁。

4) 『乙巳占』では二十八舎を「列宿」、中宮と外官をまとめて「中外官」と呼び、月蝕占や五星占の中でそれぞれ星座に言及するという形式をとっており、星座について独立に言及した箇所はないが、三層の区分は共通している。

5) 同じ中宮という語を用いているが、『晋志』や『隋志』の中宮には紫宮（紫微垣）、太微（太微垣）、天市垣を中心とする約一五三星座が含まれ、『史記』の中宮よりも広い範囲を指す。

篇（海外南経、海外西経、海外北経、海外東経）、大荒経四篇（大荒東経、大荒南経、大荒西経、大荒北経）と、中心から外縁に及ぶ地理区分を用いている。

3つ目は三垣・二十八宿の分類である。三垣とは紫微垣・太微垣・天市垣の3つの星座を中心とする区画で、北周の庾季才の『靈台秘苑』、隋の丹元子（唐・王希明ともされる）の「歩天歌」、『宋史』天文志などに見え、宋代以後広く用いられる。

そして、4つ目が本稿で取り上げる三家分類である。三家とは、星座の名付け親とされる石氏（石申）・甘氏（甘徳）・巫咸のことで、それぞれが名付けたとされる星座ごとに配列したものを三家分類と呼ぶ。先の3種の星座分類がみな星座の位置にもとづくのに対し、三家は位置にもとづかない分類であり、それぞれに属する星座が星図上にばらばらに配置されるという特徴を有する。この三家分類は唐代の天文書『開元占経』などで用いられている。

さらに細かく分けることもできるが、代表的な分類は以上の4種である。これらは、二十八宿や中外官（天の赤道を基準に、北極側を中官、南極側を外官とする）の概念と相互に組み合わせることで成り立っている。こうした分類相互の関係についてはほとんど研究されていないが、大崎正次氏は時代による変化という観点で取り上げる⁶⁾。しかし、星座分類を単線的な変化ととらえるには、三家分類と他の分類では背景となる考えが大きく異なるといわざるを得ない。位置にもとづく五宮分類から位置にもとづかない三家分類へ、そして再び位置にもとづく中宮・二十八舎・外官の分類、三垣・二十八宿分類へと入れ替わっていくというのは、不自然ではあるまいか。これは、実際には異なる2つの体系ととらえるべきであろう。五宮分類から中宮・二十八舎（宿）・外官へ、そして三垣・二十八宿へと繋がる「位置にもとづく」分類の変遷とは別に、「位置にもとづかない」三家による分類があったのではないか⁷⁾。このような観点から、次章では三家が分類として形成されていく過程を検討する。

二、三家の特徴と三家分類形成の問題

三家は、はじめから分類として成立したわけではなかった。本来は三家の説が別々に形成され、ある時期に一つにまとめられたのである。そこで、分類となる以前の三家それぞれの特徴について確認しておきたい。

三家の一人である石氏は、戦国時代、魏の石申のこととされる。石申の著作として『史記正義』引『七録』には「天文八卷」の記述がある。『開元占経』の石氏の各星座の記述には「石氏曰」とされる引用があり、星座を構成する星数、位置について説明するが、通常これらの記述は『石氏星経』から引用されたと考えられている。しかし『石氏星経』の引用は『後漢書』律曆志が最も早く、戦国時代に石氏自身が著わしたか否かはわからない。星座（星）の位置を示す去極度（北極から基準となる星までの距離）の数値から、新城新蔵氏はこれらの記述を紀元前360年頃のものとして推定し、『石氏星経』はまさしく石申

6) 注3所掲、大崎正次『中国の星座の歴史』の章立てが時代順であることや、記述の端々からそれがうかがえる。

7) ただし、星座数や星座名など共通点もあるため、互いに全く関係がなかったわけではなく、相互に影響しあったと考えられる。

が記述したものであると主張した⁸⁾。上田穰氏は同じ数値をもとに、天文記事を紀元前360年頃と紀元200年頃の2種に分け、前者は石申、後者はその後の天文家の観測であるとする⁹⁾。しかしその後、藪内清氏は去極度、入宿度（二十八宿の基準となる星からの赤経差）、黄道内外度（黄道からの度数）の3種の数値にもとづき、紀元前70年頃に観測された記録であるという説を主張した¹⁰⁾。『石氏星経』の数値が実際に石氏の観測にもとづくのであれば、去極度は戦国期の数値でなければならない。これらの時代比定について詳しくは立ち入らないが、現在確認できる引用が実際に石氏のものなのか、あるいは後世の仮託であるかを明らかにするためには、数値の計算以外にも多方面からの検討が必要であろう。

甘氏は戦国時代の甘徳である。『史記』天官書では斉の人というが、ほかに魯人、楚人という説もある。『史記正義』引『七録』には「天文星占八卷」の記述がある。席沢宗氏によれば、『開元占経』に引かれる甘氏の占文は馬王堆漢墓出土『五星占』とのつながりが強いという。そして、馬王堆漢墓がもともと楚に属する地域にあることから、甘氏が楚人であるという説を支持している¹¹⁾。

巫咸は殷の天文家とされるが、『開元占経』などに引用される巫咸の説は後世の仮託であるとする見方が強い。橋本敬造氏は、五行説との結びつきが強いこと、星座名のうち列国名を冠するものが戦国時代の姿を留めていることから、巫咸の星座系が紀元前4世紀頃に成立したと述べる¹²⁾。確かに『開元占経』に引用される巫咸の説は、たとえば紫微垣について「紫宮者天子之常居、土官也」（紫宮は天子の常居、土官なり）、少微星について「処士、水官也」（処士、水官なり）と述べるなど、星座と五行の官を結びつける記述となっている。

これら三家について、もともとは占星術を行なう際の別々の流派（学派）であったとする見方がある。三家以外にも、『漢書』芸文志や『隋書』経籍志には多種多様な天文書の名が挙がっており、それらが互いにどのような関係にあったのかは今後検討の余地がある。『開元占経』などの天文書にも多くの文献が引用されるが、唐以前の文献はほぼ現存せず、その実態を探るためには佚文の整理が必要となる。ただし、少なくとも唐代には三家の説は他の天文書よりも重視されていたようで、『晋書』天文志では三家を含めた歴代の天文家の名を列挙したあと、「皆掌著天文、各論図驗。其巫咸・甘・石之説、後代所宗」（皆な天文を著わすを掌り、各おの図驗を論ず。其れ巫咸・甘・石の説は、後代の宗ぶ所なり）と記述される。

石氏、甘氏、巫咸の三家の星座を統合して一つの星座体系としたのが、太史令の陳卓である。『晋書』

8) 新城新蔵『東洋天文学史研究』（弘文堂、1928年）。

9) 上田穰『石氏星経の研究』（東洋文庫、1930年）。

10) 藪内清「唐開元占経中の星経」（『東方学報』京都、第8冊、1937年）、同「漢代における観測技術と石氏星経の成立」（『東方学報』京都、第30冊、1959年、のち『中国の天文暦法』平凡社、1969年に再録）。『石氏星経』の成立については、ほかにも能田忠亮「甘石星経考」（『東方学報』京都第1冊、1931年）、銭宝琮「甘石星経源流考」（『浙江大学季刊』第1期、1937年、のち中国科学院自然科学史研究所編『銭宝琮科学史論文選集』科学出版社、1983年に再録）、潘鼐『中国恒星観測史』（学林出版社、1989年）などの研究がある。

11) 席沢宗「中国天文学史上的一個重要發現——馬王堆漢墓帛書中的《五星占》」（『文物』1974年第11期、のち『中国天文学史文集』第1輯、1978年に再録）。

12) 橋本敬造「先秦時代の星座と天文観測」（『東方学報』京都、第53冊、1981年）。また、李勇「《開元占経》中の巫咸占辞研究」（『自然科学史研究』第13巻第3期、1994年）でも巫咸と五行の関わりについて考察する。

天文志には、

後武帝時、太史令陳卓・甘・石・巫咸三家所著星図、大凡二百八十三官、一千四百六十四星、以為定紀。

（後武帝の時、太史令陳卓、甘・石・巫咸三家の著わす所の星図を総ぶるに、大凡二百八十三官、一千四百六十四星あり、以て定紀と為す。）

とあり、『隋書』天文志には、

三国時、呉太史令陳卓、始列甘氏・石氏・巫咸三家星官、著於図録。并注占賛、総有二百五十四官、一千二百八十三星。并二十八宿及輔官附坐一百八十二星、総二百八十三官、一千五百六十五星。宋元嘉中、太史令錢樂之所鑄渾天銅儀、以朱・黒・白三色、用殊三家、而合陳卓之数。

（三国の時、呉の太史令陳卓、始めて甘氏・石氏・巫咸三家の星官を列し、図録を著わす。并せて占賛を注し、総じて二百五十四官、一千二百八十三星有り。二十八宿及び輔官の附坐一百八十二星を并せば、総じて二百八十三官、一五百六十五星なり。宋の元嘉中、太史令錢樂之の鑄する所の渾天銅儀は、朱・黒・白の三色を以て、用って三家を殊にして、陳卓の数に合す。）

とある。陳卓について、『隋書』天文志では三国時代呉の太史令というものの、『晋書』天文志の別の箇所では魏の太史令とあり、『史記正義』では晋の太史令という記述もあつてはっきりしない。しかし、少なくとも三国から晋にかけて活躍した人物であることは確かであろう。『隋書』天文志はさらに、陳卓が三家の星座を整理し、合計283星座、1565（『晋書』では1564）星と定めたという。そして、南朝宋の太史令である錢樂之が渾天銅儀（天球儀）を鑄造した際、星座を三色に分けて示し、それらは陳卓の定めた星座数と一致したという。

ここで注意したいのは、陳卓が三家を分類として認識していたかどうかという点である。陳卓が行なった事績については『晋書』より『隋書』の方が詳しいが、両書の天文志はいずれも唐の李淳風が編纂している。より詳しい『隋書』によれば、陳卓は「三家の星官を列して」「図録を著わし」、「占いや賛を注」したものの、厳密に言えば「三家を分類」したかどうかは明確ではない。『晋書』の記述に至っては、陳卓が星図を著わしたか否かすら定かではないのである。三家を区別して色分けしたのは錢樂之であり、陳卓と合致しているのはあくまでも星座数であつて三家の区別ではない。『隋書』天文志の記述からは、陳卓が三家の星座を列べ総数を定めたことはわかるが、それらの星座が三家のいずれに属するか区別していない可能性も考えられるのである。

その傍証として、『隋書』天文志のこの記述は、張衡『靈憲』の星座数に関する記述に続いて述べられ、星座の総数が定まったことに重点が置かれている点が指摘できる。『晋書』天文志ではさらに、『漢書』天文志の編纂者である馬続の引用もあり、この傾向がより濃厚である。『晋書』と『隋書』以外には陳卓が三家の星座をまとめたという記述は確認できない。また『開元占経』などを見ると、たとえば石氏の星座には、「石氏」の引用のほかに「甘氏」「巫咸」の引用もあり、一つの星座を説明するのに三家

全ての記述が引用される例が複数ある。石氏に分類される星座がもともと石氏にのみあったというわけではなく、三家に共通の星座であった可能性が大いにあるのである。これは甘氏や巫咸の星座についても同様である。そうすると、陳卓が三家の星座を整理した際に、どれが石氏の星座でどれが甘氏の星座、どれが巫咸の星座といったふうに区別する必要は必ずしもなかったといえる。『開元占経』には多くの星座の別称が挙がっており、かつては星座名が統一されていなかったことを考えると、星座名と星座数を統一するだけでも十分な功績であったに違いない。

陳卓が星座を分類(区別)することを念頭においていたかどうかは、「位置にもとづかない星座分類がなぜ必要であったのか」という問題とも関わってくる。三家が元来分類を意図したものであったかどうかによって、三家分類の成立理由もおのずと異なってくる。

次の話題に移る前に、書目に見える三家の関連文献を確認しておきたい。南朝梁の『七録』に石氏と甘氏の著作が載っていることは先に述べたが、それ以前の『漢書』芸文志には関連の文献は見当たらない。正史の書目のうち、三家や陳卓に関わる書が初めて見えるのは『隋書』経籍志である。『隋書』経籍志には次のような書名がある(括弧内は原注)。

『渾天図』一卷(石氏)

『石氏星簿経讀』一卷

『甘氏四七法』一卷

『巫咸五星占』一卷

『天文集占』十卷(晋太史令陳卓定)

『天文集占』十卷(梁百卷。梁有石氏、甘氏『天文占』各八卷)

『陳卓四方宿占』一卷(梁四卷)

『五星占』一卷(陳卓撰)

『星占』一卷(梁有『石氏星經』七卷、陳卓記、又『石氏星官』十九卷、又『星經』七卷、郭歴撰。亡)

『天官星占』十卷(陳卓撰。梁『天官星占』二十卷、呉襲撰)

『石氏星占』一卷(呉襲撰)

『甘氏四七法』の四七は二十八宿を指し、『巫咸五星占』の五星は5つの惑星である。三家それぞれの書名を見ると、甘氏は二十八宿、巫咸は五星を書名に冠しており、各々編集方針や内容が異なる文献であったことがうかがえる。また、最後の『石氏星占』は書名に「石氏」とあるものの、撰者は呉襲という別の人物である。梁にあったという『天官星占』も、同じく呉襲の撰となっている。呉襲については詳らかでないが、『開元占経』には「呉襲天官星占」の引用があり、文字は少し異なるものの同一人物の可能性はある。三家の名を冠した文献であっても撰者が異なる例があるのは、やはり三家が星座の観測や星占に関わる別々の流派の名として機能していたからであろうか。

そのほかの書目に見える関連書名を列举すれば次の通りである(括弧内は原注)。

・『乙巳占』古占書目：「巫咸」「石氏」「甘氏」「陳卓占」

- ・『旧唐書』経籍志：『石氏星経簿賛』一卷（石申甫撰）、『甘氏四七法』一卷（甘德撰）、『天文集占』七卷（陳卓撰）、『四方星占』一卷（陳卓撰）、『五星占』二卷（陳卓撰）
- ・『新唐書』芸文志：『石氏星経簿賛』一卷（石申）、『甘氏四七法』一卷（甘德）、『天文集占』七卷（陳卓撰）、『陳卓四方星占』一卷、又『五星占』一卷
- ・『宋史』芸文志：『甘、石、巫咸氏星経』一卷、『石氏星簿賛曆』一卷

これらは全て陳卓が三家を整理し、銭楽之が三家を色分けして以後の記録である。「星経」や「簿賛」という、次章で触れる資料と類似する名称も見えるが、『旧唐書』や『新唐書』の場合は、『石氏星経簿賛』という書名で石氏が単独で撰者となっており、甘氏や巫咸の星座が合わせて採録されていたのかどうかは明らかではない。陳卓の整理後であっても、三家（特に石氏と甘氏）それぞれに独立した文献も存在したと考えられる。

三、三家分類の展開

陳卓が三家を分類としてとらえていたか否かは別にして、後世の三家は星座を分類する際に用いられる。実際にどのような文献に三家分類が見られるか、文献ごとに整理しておきたい。

1. 『三家星経』（P.2512）¹³⁾

フランスの国立図書館所蔵。P.2512は敦煌文書で、首尾が残欠する。同じ文書中にはほかに「外官占」、「占列宿変五星逆順」、「五星守二十八宿舍各以其色定其福敗」、「十二次」、「二十八宿位次経」、「玄象詩」

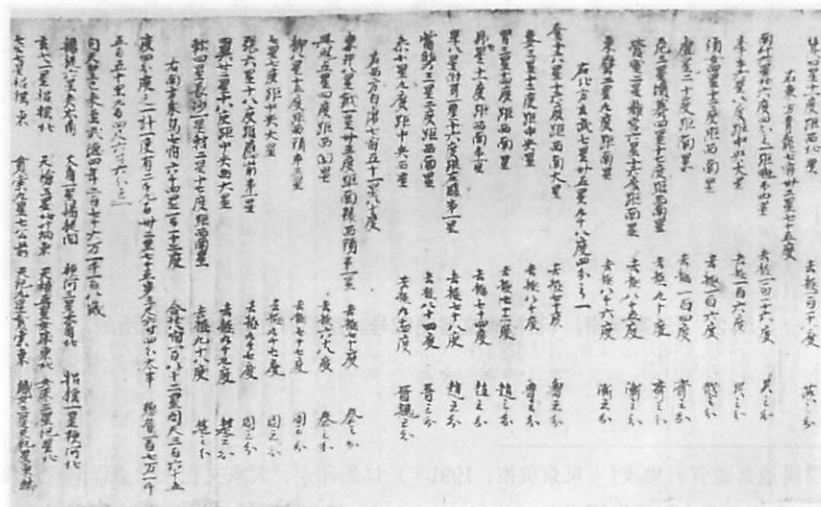


図1 『三家星経』（P.2512。『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』巻15より）

13) 先行研究として、潘鼐「敦煌卷子中的天文材料」（中国社会科学院考古研究所編『中国古代天文文物論集』文物出版社、1989年）などがある。また、フランス国家図書館所蔵の敦煌文書の図版は上海古籍出版社、法国国家図書館編『法国国家図書館蔵敦煌西域文献』（上海古籍出版社、1994～2005年）に掲載される。

なども併せて記述される。「外官占」の前には、冒頭部分が欠けているものの、「中官（宮）占」と呼べる内容があり、全体として天文に関する記述がまとめられた文書であったことがわかる。『三家星経』はP.2512では「石氏甘氏巫咸氏三家星経」と書かれ、三家それぞれの星座名や星座数、位置について説明する内容であり、三家に関して最も基本となる記述である。二十八宿は三家とは別に冒頭にまとめられ、去極度や分野など、より詳細な情報が記述される。ただし、同じP.2512の「内官（宮）星」と「外官星」の星座配列は『三家星経』と異なっており、後述する「玄象詩」も「中官（宮）星」や「外官星」、『三家星経』とは異なる順序であって、文書全体の星座配列が統一されているわけではない。

『三家星経』の二十八宿と石氏の星座の間に「自天皇已来至武徳四年、二百七十六万一千一百八歳」（天皇自り已来武徳四年に至るまで、二百七十六万一千一百八歳）という記述あることから、P.2512は唐・高祖の武徳4年（621）頃の書写と考えられる。

2. 『三家簿讃』（若杉家文書第82号）¹⁴⁾

京都府立総合資料館所蔵。若杉家文書は、陰陽頭土御門家の家司であった若杉家に伝わる文書群であり、天文や陰陽道に関する資料が多く含まれる¹⁵⁾。山下克明氏は正倉院文書の目録から、『三家簿讃』が天平20年（748）以前に日本に伝えられたと推定し、現存のものは鎌倉時代、嘉禎元年（1235）の筆写と

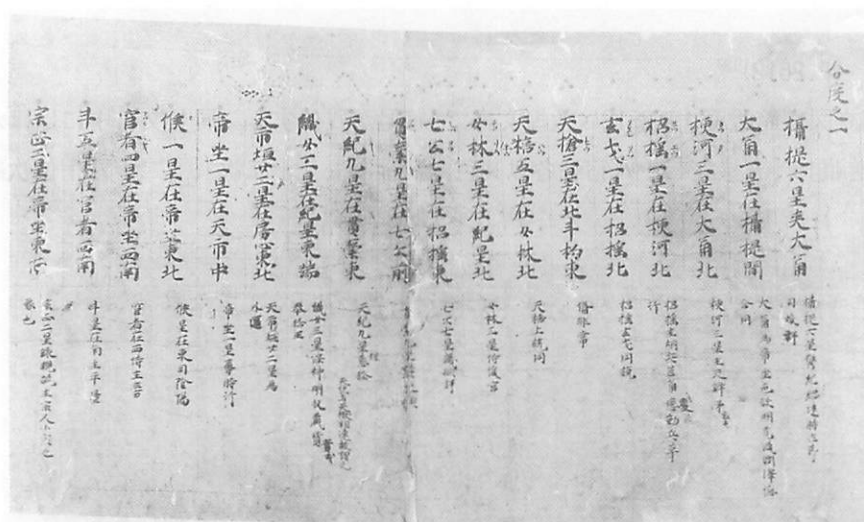


図2 『三家簿讃』（若杉家文書第82号。京都府立総合資料館所蔵）

14) 村山集一編著『陰陽道基礎資料集成』（東京美術、1991年）に影印が、大東文化大学東洋研究所編『若杉家文書『三家簿讃』の研究』（大東文化大学東洋研究所、2003年）にカラー写真、翻刻があるほか、『若杉家文書『三家簿讃』の研究』には山下克明氏による論考（「『三家簿讃』の考察」）も掲載されている。なお、京都府立総合資料館の目録では本資料は『石氏簿讃』という名称である。また、同じく若杉家文書第84号には『石氏星官簿讃』という関連資料もある。

15) 若杉家文書の概要は、京都府立総合資料館のホームページに掲載されている。<http://www.pref.kyoto.jp/kaidai/kaidai-wa.html>（2014年12月25日現在）。

述べる¹⁶⁾。一つ一つの星座の図とその説明が並んでおり、図では石氏の星座を赤、甘氏の星座を黒、巫咸の星座を黄に塗り分けている（ただし、黄色部分は薄くなっておりはっきりとは識別できない）。銭楽之の朱黒白の色分けとは黄と白の違いがあるが、後世は巫咸を黄色とする方が一般的である。『三家星経』の記述と比較してみると、『三家簿讃』の本文はほぼ『三家星経』と同様であり、それに「讃」を注の形式で加えたものが『三家簿讃』であるといえよう。『三家簿讃』でも二十八宿は三家とは別に冒頭に記述されるが、星座の色は石氏と同様赤色に着色されている。

同じく第83号『雜卦法』の冒頭には「黄帝星簿讃」があるが、これは『三家簿讃』と同時期に筆写された一連の文書であったと考えられる。三家のほかに黄帝にまつわる星座群があったことがわかるが、こちらは陳卓の定めた星座数には含まれず、『雜卦法』の中でも星座名を挙げるにとどまっている。

3. 李鳳『天文要録』¹⁷⁾

唐の李鳳（622～674）が麟徳元年（664）に撰述した。様々な天文書の記述を集め、項目ごとにまとめた類書形式の文献である。しかし中国では早くに散逸し、日本でも前田育徳会尊経閣文庫に26巻分の写本があるほか、その転写本である京都大学人文科学研究所本（25巻分）、また国立天文台本（26巻分）など数組しか現存しない。書目では日本の藤原佐世『日本国見在書目録』に「天文要録五十」とあるものの、中国では取り上げられていない。ほかに、京都府立総合資料館の若杉家文書第1237号『蔵書目録』に『天文要録』の書名があり、若杉家の周辺でも所蔵されていたことがわかる（ただし、いつ・どこの目録か詳細は不明）。

日月五星の項目に続いて、星座ごとの記述が巻11から巻50まであり、星座ひとつひとつの説明と占辞を挙げる。星座の説明では、石氏の星座であれば「魏石申曰」といった形で『三家星経』とはほぼ同文を引用するが、続けて『三家簿讃』の注の部分を本文とは区別せず、『三家簿讃』にない語も加わる形で引用する¹⁸⁾。石氏三家の説以外にも天文家の説や緯書が引用され、雑多な印象を与える。

巻1には「魏石申夫」、「斉文卿」（甘氏）、「殷巫咸」の星座・星数のほか、「黄帝」、「東晋陳卓」、「周蓂弘」の星座があったことが次のように記述される（括弧内は原注）。

天文図簿星魏石申^(夫)天（一百廿官八百八星） 斉文卿（一百十八官五百一十二星） 殷巫咸（卅四官一百卅三星）

16) 注14所掲、山下克明「『三家簿讃』の考察」194～197頁。

17) 中村璋八「天文要録について」（同『日本陰陽道書の研究』増補版、汲古書院、1985年。初出は一九六八年）、小林春樹、山下克明編『『天文要録』の考察』[一]（大東文化大学東洋研究所、2011年）、田中良明「前田尊経閣本『天文要録』について」（神鷹徳治・静永健編『旧鈔本の世界』勉誠出版、2011年）などの先行研究がある。また、薄樹人主編『中国科学技術典籍通彙』天文巻第4冊（河南教育出版社、1996年頃）、高柯立撰編『稀見唐代天文史料三種』（国家図書館出版社、2011年）には、『天文要録』の影印が収録されている。

18) たとえば、石氏の騰蛇という星座に対して、『三家簿讃』の本文では「騰蛇廿二星、在宮室北」、注では「騰蛇廿二星、主水虫」とあるが、『天文要録』では他の引用とともに「魏石申曰、騰蛇廿二日星、在宮室北。騰蛇主水虫也、主甲兵也、主水災。一名騰散、一名廻行、一名她明」と、注と本文を区別せず、より詳しく説明する。

右三家合二百八十二官 一千四百六十三星
 黄帝^(iv) (卅四宮二百十六星) 東晋陳卓 (一百十九官七百五十星) 周蓂弘 (十二官五十三星)
 右三家合一百六十五官 一千十九星
 凡右六家合四百卅七宮^(iv) 二千四百八十二星

「黄帝」の星座は若杉家文書第83号の「黄帝星簿讚」と星数が同じであり、三家以外の星座が存在していた形跡をとどめている。また、三家をまとめた陳卓自身の星座も別に存在したとする。

4. 瞿曇悉達『開元占経』

関西大学ほか複数の所蔵機関に所蔵される。唐の瞿曇悉達が開元年間(713~741)に編纂した。宋代以降行方がわからなくなり、明の万暦44年(1616)に程明善が古抄本を発見したとされる。120巻あり、日月占、五星占、彗星占、風占など様々な天文占、五行占を集録している。形式は『天文要録』と同様、様々な天文書の記述を集め項目ごとにまとめたものである。

星座の配列は『三家星経』、『三家簿讚』、『天文要録』とほぼ同じである。巻65から巻70までの各星座の項目では、石氏の星座であればまず石氏の説(『三家星経』に該当する部分)を引き、項目の最後に石氏の讚(『三家簿讚』の注に該当する部分)を引く。同様に、甘氏であればまず「甘氏」、最後に「甘氏讚」、巫咸はまず「巫咸」、最後に「巫咸讚」を引用する。間には種々の天文書、緯書を引用するが、『開元占経』の各星座の項目は、『三家星経』、『三家簿讚』を軸に据えた構成となっている。

*

上記の4種の文献は、いずれもおおむね星座の順序が共通しており、異なる箇所も誤記の範囲内である。『三家簿讚』、『天文要録』、『開元占経』がみな『三家星経』を引用し、なおかつ『三家簿讚』と『開元占経』は『三家星経』を主軸としていることから、こうした星座配列のおおもとは『三家星経』であり、『三家星経』を参考にして他の天文書が作成されたと考えられる。

上記の資料から考えると、三家分類における星座配列は固定的であるように見える。しかし、この4種の資料のほかに、同じ配列を持つ資料は管見の限り確認できない。次に挙げる資料では、別の形で三家の星座が配列される。

5. 「玄象詩」(P.2512、P.3589)¹⁹⁾

「玄象詩」は2種の敦煌文書に書かれており、いずれもフランスの国立図書館に所蔵される。各星座の位置を5字句の詩で表現する。P.2512とP.3589はそれぞれ星座の配列が異なっており、いずれも『開元占経』などとは順序が一致しない。2種の「玄象詩」に共通するのは、三家と紫微垣を組み合わせている点である。P.2512では「玄象詩」は『三家星経』のすぐあとに記述されるが、石氏・甘氏・巫咸・紫

19) 「玄象詩」に関する先行研究に、鄧文寛「比《歩天歌》更古老的通俗識星作品——《玄象詩》」(『文物』1990年第3期、のち鄧文寛『敦煌天文曆法考索』上海古籍出版社、2010年に再録)、注13所掲、潘鼐「敦煌卷子中的天文材料」などがある。



図3 「玄象詩」(P.3589。『法国国家図書館蔵敦煌西域文獻』巻26より)

微垣の順で星座名を挙げる。P.3589は前半部分が残欠しているが、「石氏・甘氏・巫咸」のセットを一定の区域ごとに並べた後、末尾に紫微垣の星座を挙げる。三家それぞれの冒頭に色を明示している点もP.2512とは異なる。石氏の星座の冒頭には「赤」、甘氏には「黒」、巫咸には「黄」と明示され、『三家簿讃』の色分けと共通するが、末尾の紫微垣の星座の冒頭には「紫」と書かれており、ほかには見られない色の区別である。P.2512、P.3589いずれも紫微垣を三家と区別している点が大きな特徴である。

6. 李季『乾象通鑑』

『続修四庫全書』に明抄本70巻が影印されるほか、日本では京都大学人文科学研究所に所蔵される。南宋の李季が編纂し、建炎4年（1130）に完成した。『天文要録』や『開元占経』と同じく、天文書を引用しまとめたものである。『乾象通鑑』では三垣分類と三家分類が併存する。巻8から巻10の「去極度数論」では各星座の星数や度数を説明するが、石申、甘德、巫咸それぞれの星座を中外官（天の北極側と南極側）に分けたあとに「石申甘德巫咸三氏紫微垣」の分類があり、紫微垣の星座が他の三家から独立して分類されている。一方、巻18から巻94の星座の説明・占辞の項目では、三垣・二十八宿・雜座に分類し、三家とは異なる分類である。前者の三家に関連する「去極度数論」でも星座の配列が『開元占経』などと異なるほか、各星座が属する分類（石氏か甘氏か、中官か外官かなど）も異なる例がある。配列のみならず、星座の位置の説明でも『三家星経』を全く引用していない。

*

文献に見える三家分類は、『三家星経』、『三家簿讃』、『天文要録』、『開元占経』に共通する配列と、それとは異なり紫微垣の星座を別に区分する配列の、大きく2種に分けることができる。これまで三家分類と見なされてきたのは前者の配列のみで、陳卓が三家の星座をとりまとめて以後、唐代まで三家分類が用いられたと認識されてきた。しかし「玄象詩」や『乾象通鑑』をみると、三家を用いた異なる配列が存在することがわかる。前4種はいずれも『三家星経』を用いており、継承関係があるものの、それ

が三家分類のすべてではないということになる。「玄象詩」は詩であるという性質上、配列が『三家星経』と異なるのは不思議ではないが、紫微垣の星座を区別しているという点は、そこに何らかの利点があったことをうかがわせる。全天の星座をその位置も含めてうたう詩の有用性は、星座の名や位置を暗記するという点にあったと考えられるが、その場合、紫微垣の星座を他の星座と区別して覚えることに意義があったのであろう。『乾象通鑑』は三家分類を用いる文献の中では成立が遅れるが、そこでも同様に紫微垣の星座を他の星座と別に項目立てることは、共通の意識がはたらいたに違いない。

三家分類に関する文献のうち、『三家星経』と「玄象詩」は敦煌文書のみ、『三家簿讃』と『天文要録』は日本にのみ現存している。『開元占経』は複数残存しているものの、宋代頃には大部分が散佚し、明末になって仏像の中から抄本が発見されたとされている。佐々木聡氏は明王朝に秘蔵された抄本の存在を指摘するが、いずれにせよほとんど流布していない空白の時期があった²⁰⁾。敦煌を除いて中国において三家分類を用いる文献は、明末までほとんど流布しなかったと考えられる『開元占経』と、三垣分類とともに三家・紫微垣の分類を用いる南宋の『乾象通鑑』しか現存しないということになる。

四、三家の色分け

それでは、一方で星座の図を三家ごとに塗り分けるという方法は、実際にどれだけ用いられ、どれだけ現存しているのでしょうか。星座を色分けした例を確認してみよう²¹⁾。

南宋以降、石刻された天文図が数種現存し、その拓本も多く出回っているが、星々は色分けされていない。星座を描く早期の資料として、遼寧省北票市にある北燕の馮素弗の石槨（外棺）に描かれた星象図がある。馮素弗は北燕（407～436）の天王馮跋の弟で、棺の上にある9つの石板に日月、星座が描かれ、星座は赤・黄・緑に色分けされていた。しかし、星座数は少なく星座名もないため、色分けが三家にもとづいているわけではないようである。また、唐の章懷太子墓には彩絵全天星図があり、星座を金箔・銀箔・黄・白などに色分けしていたというが、詳細は不明である。両者はいずれも墓に天上世界を描いた、多分に装飾的な星図だったと考えられ、精密に天の星座を写しとろうという意図はなかったであろう。色の区別も三家とは関係なかったと考えられる。他の墓室の天井にもしばしば星や星座が描かれたが、抽象的であるか二十八宿など代表的な星座をモチーフとして描くのみである。

1. 敦煌星図（S.3326）²²⁾

イギリスの大英博物館所蔵。描かれた時期について、ジョゼフ・ニーダム（Joseph Needham）氏は

20) 佐々木聡「『開元占経』の諸抄本と近世以降の伝来について」（『日本中国学会報』第64集、2012年）。のち佐々木聡『『開元占経』 閣本の資料と解説』（東北アジア研究センター、2013年）に再録。

21) 天文図（星図）に関する先行研究として、宮島一彦「日本の古星図と東アジアの天文学」（『人文学報』第82号、1999年）、周曉陸『歩天歌研究』（中国書店、2004年）などがある。また図録として、中国社会科学院考古研究所編『中国古代天文文物図集』（文物出版社、1980年）、潘鼐編著『中国古天文図録』（上海科技教育出版社、2009年）がある。

22) 先行研究として、席沢宗「敦煌星図」（『文物』1966年第3期、のち中国社会科学院考古研究所編『中国古代天文文物論集』文物出版社、1989年に再録）がある。また、図版は中国社会科学院歴史研究所ほか合編『英蔵敦煌文献』漢

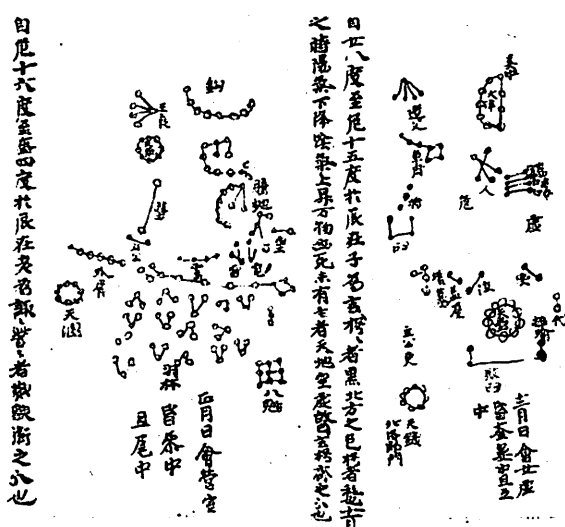


図4 敦煌星図（S.3326。『英蔵敦煌文獻』漢文仏教以外部分・第5巻より）

940年頃、馬世長氏は唐の中宗期（705～710）と比定する²³⁾。星座を十二次と北極付近に分けて描く。周曉陸氏は石氏・巫咸氏の星を黄色、甘氏の星を黒に色分けすると述べるが、実際は赤・黒・白（塗りつぶしなし）の三色である²⁴⁾。おおむね石氏が赤、甘氏が黒、巫咸が白であるものの、明確には分けられない。三家の色分けを意識しつつも精密ではなく、色分けにさほど注意が払われていないようである。

2. 紫微垣星図（写経類第58号）²⁵⁾

敦煌県文化館所蔵。敦煌文書のうち、天の北極周辺（紫微垣）の星座を描いた星図である。星座は赤と黒の2種に色分けされており、石氏と巫咸は赤、甘氏は黒に塗り分けてある。残欠があり全体像は明らかではないが、上述の敦煌星図とは異なり、内規（周極星の範囲）を示すと考えられる円が描かれる。星図に続いて「占雲氣書」のタイトルがあり、天文・雲気をまとめた文書であったと推測できる。

文仏教以外部分・第5巻（四川人民出版社、1992年）に掲載される。

23) Joseph Needham, *Science and Civilisation in China: volume 3 part 2*, Cambridge, Cambridge University Press, 1959（邦訳：ジョゼフ・ニーダム『中国の科学と文明』第5巻、思索社、1976年）、馬世長「敦煌星図の年代」（中国社会科学院考古研究所編『中国古代天文文物論集』文物出版社、1989年）。

24) 注21所掲、周曉陸『歩天歌研究』192頁。

25) 先行研究に、馬世長「敦煌写本紫微垣星図」（中国社会科学院考古研究所編『中国古代天文文物論集』文物出版社、1989年）がある。

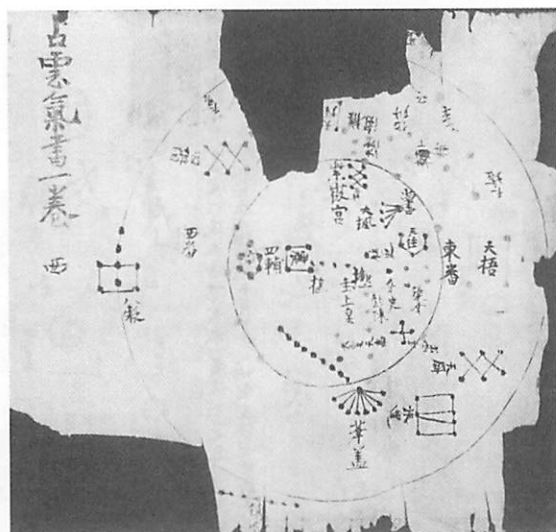


図5 紫微垣星図（『中国古代天文文物図集』より）

3. 蘇頌『新儀象法要』²⁶⁾

水運儀象台（水力によって動く天文観測時計）を作成した北宋の蘇頌（1020～1101）によって、元祐7年（1092）に上呈された。巻中で天をいくつかの区画に分けて星図が描かれるが、現存のものは彩色されていない。甘氏の星座が黒塗りである以外は、石氏と巫咸は白（塗りつぶしなし）である。しかし「星有三色、所以別三家之異也。出于石申者赤、出于甘徳者黒、出于巫咸者黄」（星に三色有るは、三家の異を別つ所以なり。石申より出づる者は赤、甘徳より出づる者は黒、巫咸より出づる者は黄）という記述があり、本来は色分けされており、伝本の過程で色付けが省略されたとも考えられる。特に版本の場合、あえて彩色しなくなった可能性がある。

また、先の引用の続きには、「紫宮諸星、亦同出三家。中外官与紫宮星、総二百八十三名、一千四百六十四星」（紫宮の諸星も、亦た同じく三家より出づ。中外官と紫宮星と、総じて二百八十三名、一千四百六十四星）という、中外官と紫宮（紫微垣）を区別した記述がある。三家はそれぞれ中官と外官に区分することがあるため、これは三家と紫微垣を合わせて星座の総数を述べる構図になっている。「玄象詩」や『乾象通鑑』と同様に紫微垣を意識した記述と考えられる。

26) 山田慶児、土屋榮夫『復元 水運儀象台——十一世紀中国の天文観測時計塔』（新曜社、1997年）には、『新儀象法要』の訳注がある。本稿の引用はこれに倣った。

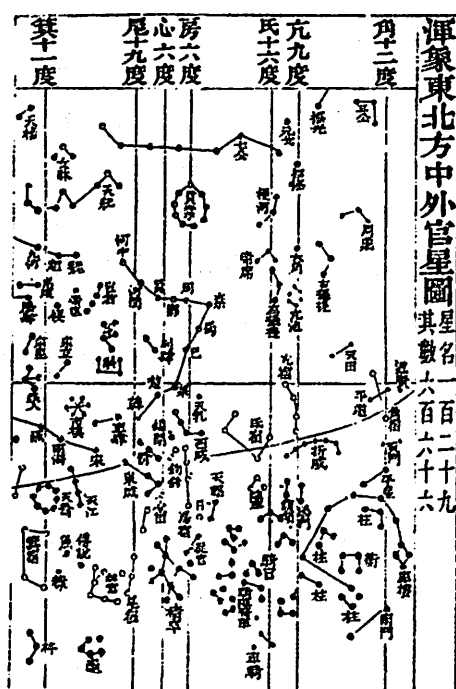


図6 蘇頌『新儀象法要』（『中国古天文図録』より）

4. 「歩天歌」²⁷⁾

作者は隋の王希明（丹元子）とされる。丹元子はあるいは唐の人物ともされるが、不詳。「歩天歌」は星座に関する詩賦の中で最もよく知られており、単独でまとめられる以外に、後世多くの文献に星図と併せて引用もされる。代表的な文献には『靈台秘苑』巻一、『通志』天文略、『武備志』占度載などがある。星座の位置のほか星数も詠み込まれており、星座を歌った詩賦の中では完成度の高い作品である。

星座の分類自体は三垣・二十八宿の分類であり、ともに描かれる星図も黒白に塗り分けられているものとそうでないものなど文献によって様々で、塗り分けられている場合は『新儀象法要』と同様、大部分が甘氏は黒、石氏と巫咸は白（着色なし）となっている。しかし「歩天歌」では、歌の中に「紅」「黒」「黄」と一部の星座について色が明示され、三家を区別する。星図の方は伝写の過程で図自体が乱れており、色分けも正確ではない。一方の歌自体も文献によって字の相違が激しく、ある文献で色が明示されていても、別の文献では明示されないなど、大きな相違がある²⁸⁾。

＊

また、前章で挙げた文献にも一部色の明示がある。『三家星経』では、三家それぞれの末尾に星座・星の合計と色が記述される。「玄象詩」では、先述のとおりP.3589の三家それぞれの冒頭に「赤」「黒」「黄」の色の記述があり、『乾象通鑑』でも、巻8から巻10の「去極度数論」で、三家それぞれを区分する章題

27) 先行研究として、注21所掲、周曉陸『歩天歌研究』がある。

28) 周曉陸氏が様々な「歩天歌」を比較しているが、たとえば『天文類抄』（朝鮮奎章閣蔵本）で「兩紅南北正直着」となっている部分が、『星図歩天歌』（清陶齋蔵清抄本）では「兩星南北正直看」になっている、という具合である。

の末尾に「赤」「黒」「黄」と書かれている。「玄象詩」と『乾象通鑑』で異なるのは、「玄象詩」が紫微垣の星座を「紫」とするのに対し、『乾象通鑑』では「石申甘德巫咸三氏紫微垣」の分類であっても「紫」とはせず、下位分類として三家ごとに紫微垣星座を細分化し、それぞれ「赤」「黒」「黄」とする点である。そのほか、明代以降の版本に星図が掲載されたものがあるが、多くは黒白に色分けするか、全く色分けしないものであり、次第に西欧の影響を受け、星を丸ではなく星型で描くようになる²⁹⁾。

このように、実際に三家を厳密に色分けした星図はほとんど残されていない。文字の上では三家の色分けを明示するものの、星図の場合は精確に転写されないか、彩色されない。このことは、ある時期まで意味を持っていたはずの三家の色の区別が、次第にその意味を失っていき、継承されなかったということであろう。

五、日本における三家分類の受容

それでは、日本において三家分類はどのような位置づけにあったのであろうか。第三章で挙げた『三家簿讀』は日本にのみ現存するが、星座ひとつひとつを丁寧に描き、色付けしている。三家の分類ごとに星座を描いているということもあって、図の色分けも正確である。同じく『天文要録』は、星図はないものの、明確な三家分類にもとづく分類である。『三家簿讀』は陰陽頭土御門家の家司である若杉家に伝えられ、『天文要録』は加賀藩主前田家に伝えられてきた上、若杉家文書の蔵書目録にも名を連ねる。日本ではこれらの文献が脈々と継承されており、伝写の際の乱れも比較的軽微であったと考えられる。このような状況から、日本では三家分類の枠組みが大きな変化を経ることなく伝えられたのではない。

三家分類を継承する最も顕著な例が、江戸時代に渋川春海の子昔尹の名で刊行された「天文成象」の星図であろう。「天文成象」では三家をそれぞれ赤、黒、黄に塗り分けた上で、渋川春海が独自に名づけた星座を加えて青に色付けした。「天文成象」と、渋川春海が描いた「天象列次之図」、「天文分野之図」は江戸時代の代表的な星図であり、のちに長久保赤水が「天文星象図」で三家を色分けするなど、他の星図にも影響を与えた。

ただし、日本においても全てが三家分類に則った星図だったわけではない。二十八宿のみを赤に色付けるものや、二十八宿の距星（基準となる星）のみが赤いもの、一つの星座であっても黒と白（着色なし）の星が併存する星図もある。それでも、中国で早くに色分けの意義を失ったのに対し、日本では様々な星図と並行して三家の色分けが用いられるというのは、日本の三家分類の大きな特徴であろう。

日本では、三家に加えて他の星座に言及する文献が残されているという点も興味深い。第三章で触れたように、若杉家文書第82号『雜卦法』には「黄帝星簿讀」があり、『天文要録』にも黄帝・陳卓・賈弘の星座数が挙げられる。これらの星座はもともと中国で生み出されたと考えられるが、中国に現存する天文書では表に現われない³⁰⁾。中国では早くに廃れてしまったであろう三家以外の星座の存在を、日本

29) 注21所掲、潘鼎編著『中国古天文図録』79～141頁には、明から清にかけての星図が数多く掲載されている。

30) ただし、黄帝の諸星座のうち、南門鼓吹、建樹百果、熊羆の3種は、北魏の太史令張淵「觀象賦」（『魏書』術芸列

では伝え続けてきたのである。それに加えて洪川春海は、独自の星座を生み出して三家に加えた。このように日本では、三家分類を主軸としつつも、他の星座の存在を許容する姿勢が見受けられる。

おわりに

本稿では、星座分類法のひとつである三家分類がどのように形成され、展開し、日本に受容されたかについて考察した。三家分類は『開元占経』などで用いられ、よく知られた分類ではあるが、文献を整理、比較していくと、その実態は不明な点が多いことに気づかされる。第二章で指摘した、なぜ位置にもとづかない星座分類が必要であったのかという問題は、今後他の分類も含めて検討し、解明していきたい。

中国に残る三家に関する資料はわずかである。そもそも、『晋書』天文志・『隋書』天文志では陳卓が三家を統合したことに触れ、星座の総数も陳卓に近く、『乙巳占』の書目でも三家や陳卓の名が挙げられているにも関わらず、それらを著わした李淳風自身はどの著作にも三家分類を採用していない。三家分類にもとづく『天文要録』は李淳風とほぼ同時期に完成しており、李淳風が三家を知っていたことは確かであろう。李淳風に限らず、歴代の正史では三家分類は採用されていないのである。このことが何を意味するのも、大きな謎である。

中国における三家の状況とは異なり、日本では三家分類が受容され、受け継がれてきた。星図を描く際にも三家を正確に色分けしている。中国で早くに意味を失った三家分類が、原型に近い形で残されたのが日本の特徴といえるであろう。日本に残るこうした資料から、逆に中国のかつての星座分類の実態を明らかにすることもできよう。

本論文は、一般財団法人橋本循記念会 平成26年度 中国伝統文化に関する研究・調査助成（課題：若杉家文書『三家簿讀』の調査に基づく三家分類法の研究）を受けた成果の一部である。

また本論文は、平成26年度 東西学術研究所第4回研究例会（2014年9月5日）における口頭発表「星座分類中の三家分類の位置づけ」をもとにまとめたものである。

伝所収）に見える。